會　　務

土木學會誌　第十七卷第五號　昭和六年五月

◎昭和六年四月九日役員會を開く，那波會長，眞島，前川の兩副會長，木津，平井，谷口，橋本，池田，生野，田井の各常議員，丹治，牧野の兩主事出席，那波會長議長席に着き下記事項を決議せり。

△大堰堤國際委員會日本國內委員會參與員及專門委員選出の件は別途決議の上報告すること。

其他會務に關する事項

○昭和六年四月十三日編輯委員會を開く，那波會長，黑河內委員長，高橋，井上の各編輯委員，菊池囑託出席，會誌編輯上に就き決議を爲せり。

○昭和六年四月十五日土木學會誌第十七卷第四號發行，成規の手續を了し同月十六日より一般會員に配布せり。

調査會記事

○昭和六年四月十日第二十五回用語調査會幹事會を開く，中山委員長，中川幹事長，福田，菊池，中桐，三浦，糠澤，樫部の各幹事及中川，紀成の兩囑託出席，水力電氣之部（委員意見），應用力學之部（幹事分科會修正案）の兩案の審議を爲せり。

○昭和六年三月十六日以降同年四月十五日迄に於て入會の手續を了し名簿に登錄したる氏名次の如し（⊙印は轉格を示す）。

會員

松村種雪君　縄田京吉君　○丸山悅三君

准員

山田軍治君　○加藤六郎君　桑山幹一君　○藤芳義男君
三浦源三郎君　本間仁君

○下記諸君は退會せられたり。

會員

用瀨松太郎君　佐藤英夫君　黑岩隆君

准員

水間榮之助君　大石秀白君　加藤俊夫君　鈴木富治君
志戸田直道君　矢島恭安君　日野官藏君　山田清作君
中村嘉米三君　遠藤竹三郎君　小合虎馬二君　飯田憲美君

川田光惠君

○昭和六年三月十六日以降四月十五日迄に寄贈又は交換を受けたる雜誌其の他下記の如し。

電氣製鋼第 3 號	1 冊	電氣製鋼研究會
東京土木建築業組合報第 3 號	1 冊	東京土木建築業組合
造船協會報雜纂第 107 號	1 冊	造船協會
セメント界彙報第 255 號	1 冊	日本ポートランドセメント同業會
內外工業時報 3 月號	1 冊	最新工學普及會
早稻田建築學報第 8 號	1 冊	早苗會
業務研究資料第 9, 10 號	2 冊	鐵道省大臣官房研究所
滿洲技術協會誌第 42 號	1 冊	滿洲技術協會
建築雜誌第 543 號	1 冊	建築學會
東京工業大學一覽	1 冊	東京工業大學
日本鑛業會誌第 551 號	1 冊	日本鑛業會
復興局技術試驗新報告 第一部 第1篇～第3篇 / 第二部 第1篇～第3篇	16冊	復興事務局
滿洲電氣協會々報第 7 號	1 冊	滿洲電氣協會
帝國鐵道協會々報第 3 號	1 冊	帝國鐵道協會
熊本工業會誌第 4 號	1 冊	熊本工業會
シビル第 4 號	1 冊	シビル社
東京工業會誌第 4 號	1 冊	東京工業會
工業要錄第 3 號	1 冊	工業資料調査會
啓明會第 12 回事業報告書	1 冊	啓明會
機械學會誌第 34 卷第 168 號	1 冊	機械學會
工人第 113 號	1 冊	日本工人倶樂部
港灣第 9 卷第 4 號	1 冊	港灣協會
昭和四年度直轄工事年報及同附圖	2 冊	內務省土木局
名古屋工業會々報第 96 號	1 冊	名古屋工業會
工學第 19 卷第 4 號	1 冊	東京工學社
三菱電機第 7 卷第 3 號	1 冊	三菱電機株式會社神戶製作所
業務研究資料第 19 卷第 11～14 號	4 冊	鐵道大臣官房研究所
Memoirs of the Ryojun College of Engineering Vol. III No. 3, 4.	5 冊	旅順工科大學

土木建築工事畫報第 7 卷第 4 號	1 冊	工事畫報社
建築と社會第 14 輯第 4 號	1 冊	日本建築協會
セメント界彙報第 256 號	1 冊	日本ポルトランドセメント同業會
衞生工業協會誌第 5 卷第 3 號	1 冊	衞生工業協會
The Excaviating Engineer Vol. XXV. No. 3.	1 冊	三井物產株式會社機械部
建築讀本	1 冊	警視廳保安課長
日本建築士第 8 卷第 3 號	1 冊	日本建築士會
工業化學誌雜第 4 冊 同歐文綴	1 冊	工業化學會
セメントコンクリート道路	1 冊	日本ポルトランドセメント同業會
ユアサ時報第 7 號	1 冊	湯淺蓄電池製造株式會社
東京土木建築業組合第 4 號	1 冊	東京土木建築業組合
セメント工業第 4 月號	1 冊	土木建材商報社
電氣學會雜誌第 4 冊	1 冊	電氣學會
工政第 135 號	1 冊	工政會
電氣製鋼第 4 號	1 冊	電氣製鋼研究會
第七回治水事業に關する統計書	1 冊	內務省土木局

土木學會第十六回視察旅行記事

視察箇所　伊豆地方及び清水港震害狀況
期　日　3 月 21 日(春季皇靈祭), 同 22 日 (日曜日), 2 日間

我が學會の年中行事の一つである視察旅行を例年より少し季節を早めることゝなり，此處彼處と種々計畫を樹てた結果,3 月 21 日の祭日と翌 22 日の日曜日の兩日を利用し伊豆地方並に清水港震害狀況の視察を兼ね修善寺溫泉一泊旅行を催す事に決定した。

何時も視察旅行に懸念されるのは天候であるが,旅行の第一日は前日來の密雲も晴れ,旭光輝き，げに清々した朝となり，天は恰も我々の旅行を讃美して居る觀が在つた。

午前 8 時には東京驛乘車口コンコースには視察團のための受付が設けられ，受付子は誰が一番槍かと或る興味を以て待つ間も無く荒井綠君ニコニコし乍ら一番乘りをされた。

コンコースを蔽ふ高いドームは右往左往する人々に御身達の旅行は此の俺が安全に保證して上げるよと云つた慈悲深い面持である。改札口上方にある光採窓よりは麗彩なる陽光がドーム一杯に埋め，暫時瞑目するやフエルト草履，駒下駄，靴或は少女の鈴付ポックリ下駄等或は早く或は遲く床上に交錯する音色こそ高きドームにコダマし，其の中に紳士の持つ細身のステツキ夫れとも學生風の太いステツキ等の床に輕く打つ音響に調和されて聞えて來る。眼を開けば，彼方の柱の蔭に見送人ならんシークな洋裝或は和裝の裾模樣の麗人達の精練されたるポーズに微笑をたゝへ，喋々なる樣こそ此のドームならでは眺め得べくも無いことである。此の情景こそ雜踏の反面に存在する東京ステーション乘車口ドームの持つ唯一の魅力である。

本會本日の參會者の晴々しい如何にも愉快げなる談笑が此の天然の音樂のメロディーを暫しの間コングクトして居る中に受付を終了したのは 9 時頃であつた。

ホームには熱海行列車の後部に特に一行のために臨時連結された二等車には早や本會のお歴々が一同和氣靄々たる裡に朗らかな雜談に耽つて居る，間もなく午前 9 時 5 分出發のホイスルと共に我々を長閑なる春の旅へと引きづり込んでしまつた。

尙ほ此の視察旅行參加者を記すれば次の如く（順序不同）である。

荒井　緑	井上二郎	井上秀二	伊藤孝治
飯塚　博	稻垣兵太郎	稻垣　甚	今泉茂松
岩淵英之助	遠藤藤吉	大井上前雄	岡崎正伸
岡山銀次郎	片野文吉	川上浩二郎	神谷國繁
木津正治	櫛田九郎	藏重哲三	來島良亮
眞田秀吉	櫻井季男	關信　雄	曾山親民
田井九一	田中寅男	田中正夫	田邊良忠
田口康平	丹治經三	鶴見一之	那須章彌

那波光雄	中野深	永田兵三郎	南部常次郎
沼田征矢雄	橋本敬之	平井喜久松	種田武雄
細野芳彦	堀田貞造	松永工	森友雄
山本新次郎	山口秀造	吉田耕一	前川貫一
蒲孚	島野貞三	藏重長男	堀江勝己
立花次郎	北村嘉太郎	山岸倉藏	中川一美
小林孝造	紀成中	海老澤昇次郎	松本利一
田淵義作			

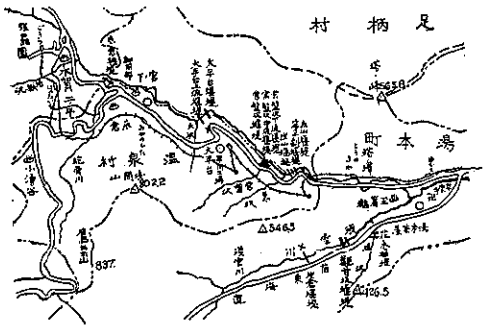
これで一行の顔振れが揃つたわけだ。而して午前 15 時 40 分には早くも小田原驛に到着，此處にて當日斡旋下さる神奈川縣廳のお役人達のお出迎を受け，視察團一行專用の富士屋大型自動車 3 臺に身をゆだね，午前 11 時 6 分同所を出發，函嶺の嶮路を越え修善寺溫泉目指して第一日の行程の翔破を試みるのであつた。

間も無く源を蘆ノ湖に持つ早川の激流を左に眺めつゝ箱根街道を走り行く程に同 11 時 20 分頃には左方に小高き石垣山が見える。海拔 858 呎あり，今山上に殘つて居る礎石こそ世に傳へらるゝ豐太閤一夜城の趾である。

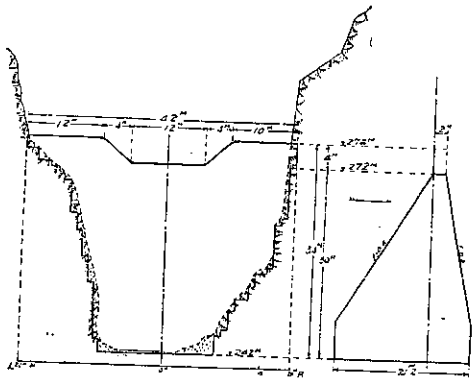
續いて早川に懸かれる吊橋が見える，此の橋は三枚橋で，渡れば箱根舊街道に入るのであるが，我々の自動車は之れを左手に眺めつゝ同 27 分頃には塔ノ澤溫泉を過ぎる。此の邊，湯坂山と塔ノ澤との間を深く浸蝕して流るゝ早川の溪谷は美しい，益々深く曲りくねつて流れて居る早川の溪谷に沿ひ急カーブの坂路を進む。

右手の湯坂山の中腹には箱根靈驗曇仇討の引合せに出る阿彌陀寺があり，貞女初花が“こゝらあたりは山家故紅葉のあるのに雪がふる” と云つたのは此の邊であるさうな。

三度早川を後に同 11 時 35 分には大平臺に着き，山脚保護及び轉石防止の砂防工事の實況を視察した。



早川流域砂防堰設置箇所圖



大平台上流堰堤斷面の一例

此の邊り早川は年々水勢に依る土砂の流下甚だしき爲，上圖に示す如く12 箇所に工事費65 萬圓を投じて砂防堰を築造せしものである。

此の砂防堰の竣功後は此の堰のために上流部に自然に砂利採集場が出來，以前は此の附近の街道の保修には總べて碎石を使用したものであるが，神奈川縣では此の採集場より取りた立派な川砂利を使用して尙餘りあるとの事であつたが，之れも砂防工事の思はぬ利益である。

同 40 分此處を出發し，同 52 分には早や箱根第一の殷賑の地宮ノ下溫泉場に着き，富士屋ホテルのグリルに於て輕き晝食を取つた。食後暫時の休憩中，田邊神奈川縣土木部長より一場の御挨拶を兼ねて，宮ノ下を中心とした風光明媚にして豐富な溫泉場を諸所に持つ此の地域を以て箱根國立公園化運動の近況や，昨年の伊豆大地震では箱根山一體として之れを見る時は山頂に近き箱根町附近が最も被害激甚で中腹に位する此の廣いグリルの天井や壁は御覽の通り少しの損傷もなく地震前その儘であるなぞの御話があつた。一同眺望絕佳のバルコニーで少憩の後神奈川縣廳より色々のパンフレットの分配を受け，午後 1 時 37 分には再び車上の人となつた。

小田原より塔ノ澤間は昨年の震害の跡は今日では外觀的には目に觸れぬ樣である，塔ノ澤を過ぎ，宮ノ下までの間は所々溪谷或は山脚切取箇所の崩壞せるもの（寫眞第一參照）を散見せし位で殊に富士屋ホテル內の模樣は夢想だにしなかつた位であつたが。

宮ノ下御用邸を右下に望み乍ら愈々急カーブ，急勾配の坂路に差し掛つたが，自動車はグングンと上り，同 50 分には小涌谷溫泉を過ぎる。此の附近は躑躅の名所でもあり，又箱根隨一の眺望絕佳の地で附近は櫻樹多く春は櫻花爛漫として一目千本の稱がある。秋は幽邃な蓬萊山腹を背景として紅葉の名所である。

午後 2 時頃には左手に鷹ノ巢山を眺め，續いて前方に上と下とに二つ揃つた山が見え，恰も饅頭を二つ列べた樣である，之れが双子山で箱根舊街道は此の山の反對側の麓を通つて居る。又右の方には箱根で最高の神山が見える，海拔 1 6000 米である。

2 時 10 分頃には芦ノ湯溫泉町を過ぎた，此の町を出た邊は函嶺越へ自動車道の最も高い所(海拔 3 000 尺）であるそうだ。

芦ノ湯附近より進むに從ひ被害狀況は甚だしく（寫眞第二，第三參照），家屋は 100％倒壞之或は傾斜し，道路面の陷沒，山脚法面の崩壞，擁壁構造物は全部被壞の慘狀で，今ではヤットれ等の交通の支障物は整理され自動車交通に支障なき程度で，目下盛んに復舊工事中であつた。

2 時 12 分には左手の道傍に少し離れた小高き所に曾我兄弟虎御前の墓があり，ションボリと立ち並んで居るのが見える。少し進んで弘法大師の御手づから彫刻なされしと傳へらるゝ廿五菩薩の像を見る，此處から双子山の麓を通つて舊街道に出づれば “神崎與五郎の東下

り”で有名な甘酒茶屋へ出ることが出來る。車上からは芦ノ湖の湖面が段々開けて見え出した。元箱根町を右方に眺めつゝ午後2時 25 分には芦ノ湖畔塔ケ島離宮の門前に着いた。此處で一同自動車を捨て，離宮は宮內官の案內で御苑內被害箇所をくまなく拜觀した。離宮本殿の柱は床面で全部折れ，銅葺の屋根は少し捻れて倒潰して床面に蔽ひ被ぶさり，又看守官舍は大地辷のため横倒れの殘骸を曝し綺麗な庭園は見る影も無きまでに荒れ，芝生には至る處大陷沒，大龜裂で滿されて居る有樣は宛然箱根附近の被害の如何に甚大なりしかを物語るに充分である，唯啞然たるのみであつた。

同3時同所を發足，湖畔關所の跡なる標を右方の杉並木の間に眺めつゝ，間も無く新らしき木の香漂ふバラック新築中の箱根町に出で此處にて一時下車し，街道の山側の裏手に出で山津浪に依る地辷箇所の狀況を視察した。此處の山津浪は極少の水氣を含む土が地震動に依つて緩勾配の滑り面上を數十町步に亙る谷間の土が2町餘り移動し來り，街道に沿ふて家々の裏に在る杉並木に依つて之れが受留められて居る，此の受留められて居る附近では滑り土砂の厚さ 10 餘尺であつた。此の地辷に依つて約1町餘の上域より下域へ而も垂直の儘移動して居るのは如何にも不思議な現象であつた。

午後 3 時10分頃此處にて神奈川廳縣の方々に別れを惜み一路三島へ向け邁進した，同 3 時20分神奈川，靜岡兩縣の縣界に到り我々一行の自動車は一時停車した，靜岡縣廳の方々の態々の御出迎であつた。注意されて始めて氣が付いて見れば道の兩側の山脚防護の擁壁は靜岡縣側がコンクリート造，神奈川縣側は間知石積で，セクションの限界を一目瞭然たらしめてあつたあたりは面白い現象である。

同3時 35 分には右の方に秀吉の軍勢に備ふるため北條氏泰が築造した山中城の城跡を望みつゝ十二丁峠の所で自動車を留め，車中より激震の暴威により無數の斷層と大龜裂の生じた田代盆地の一角を一瞥し（**寫眞第四**參照），愈々之れから下り坂路を土煙を上げつゝ輕快なるドライブを始めた。途中で小部落の慘狀や地崩れの被害箇所を散見しつゝ三島町に入つた，箱根町附近の慘狀の有樣を省みる時は，此の附近は家屋の傾斜を防いだ新しい支柱の家屋を散見したのみで被害の點は餘り目に付かぬ位であつた。

附圖（右下のもの）に見らるゝ樣に修善寺と伊東の中間邊と箱根町とを連ねた一大斷層線に沿ふた部分が震害の最も激しく，田代盆地の一角の彼の廣大な地域に涉る地割，地辷の狀態が物語つて居る事實を思ふときは，昨冬の伊豆地震の如何に猛威を極めたか想像出來る。

尙參考のため該地の震災概要を示せば次の如し。

1 發震の日時及び震度

昭和5年 11 月 26 日午前4時2分47秒發震，驚天動地，地質構造線の活動に由り一瞬にして戰慄すべき光景を展開せり．其の最大震幅は 68,5粍以上の强震（性質稍急）にして，之れが震動時間は約5分間の長

きに亘り大正十三年九月一日東京地方震災以上と言はる，震源地は沼津南東 15 粁，丹那浮橋を繼ぐ地點にあり。

餘震は 11 月	26 日	27 日	28 日	29 日	30 日
	81 回	12 回	13 回	4 回	5 回
12 月	1 日	2 日	3 日	4 日	
	無し	13 回	66	5 回	

2 埋沒家屋及び流失家屋

埋沒せられたる家屋中最も深く沒入したるは中狩野村鍛冶山々麓にして，3 戸 15 名は全く生埋となり，當日以來全村協力或は各種團體の應援に依り發掘に努力せるも，4 名漸く發見するを得，未だ殘る 11 名は發掘するを得ず，村民の疲勞其の極に達せり，又中大見村に於て 3 戸 7 人の埋沒家屋は 2 日漸く死體を發掘するを得たり，流失家屋は修善寺町に 15 戸ありて未だ 2 名の死體を發見するに至らず。

3 震災損害見積額

當地震害調査の結果損害總額は實に 20 455 564 圓に上り，其の內譯は次の如し。

家屋	8 520 640 圓,	家財	1 549 150 圓,	商品	520 000 圓
工場	30 000 圓,	公共營造物	3 357 000 圓,	神社	570 000 圓
寺院	630 000 圓,	農林關係	4 278 774 圓,	鐵道港灣	730 000 圓

4 罹災民の狀況

物資の配給並に慰問品の分配等に依り罹災民は大體に於て衣類，食料品には不自由を感ずるものなきも，居所に就ては未だ完全に至らず，尙餘震の頻發に依り人心稍々不安に陷りて屋外に假眠をなす者あり。

5 震災地復興事務出張所設置

震災地復興に關し市町村長を指導督勵し復興事務の促進を圖る爲所々に出張所を設けた。

6 震害復舊土木事業概況

震災地に於ける土木關係の震害狀況を述ぶれば，

a. 道路　道路の被害狀況を概別せば，切取法面及び土抱工の崩壞に起因するものと路體工の龜裂沈下滑落に因るものであつた。

b. 橋梁　橋梁の被害は縣道にありては架替を要するもの 11 橋，修繕を要するもの 18 橋，町村道の橋梁は大部分架替を要す程度の被害を蒙れり。

c. 河川　河川は土堤皆無なりしを以て被害は殆ど護岸の缺所にて僅に 8 箇所に過ぎざりしは幸とする所であつた。

d. 海岸及び海港　海岸工事は何れも町村支辨の汐除の被害あるのみ，港灣は伊東港に於ける防波堤の突端石積の落脫せるもの，他は淸水港とす。

e. 砂防　激震の暴威無數の斷層と龜裂とを生じ崩壞を來せる箇所枚擧に遑あらざる狀を呈せり。

午後 4 時官幣大社三島神社前に出で，那波會長一同を代表して玉串を捧げた，同社は目下境內の復舊に努められて居た，

一同神前で神酒を頂き，境內に臨時設けたを休憩所で三島町長より茶菓の饗應を受け，同 4 時 25 分同所を辭し，三島附近で被害の最も激しかつた大場町に同 4 時 35 分着き，此處で下車して田方郡中郷村赤玉地邊にて耕地の被害狀況を視察した（**寫眞第四**參照）。此の邊は山麓地帶で灌漑用水に不便で辛ふじて谷間よりの湧水を利用して居たのであるが，約 35 町步

に渉る陷沒，隆起，龜裂等のため田面の起伏甚だしく，道路，畦畔，水路の位置移動し，或る箇所は水溜りを生じ，さながら湖水の狀態を呈して居り，良耕地は全く不毛の地と化して終つて居る。同所耕地組合では今度用水系統を整理し完全な復舊土木工事を起さんと着々計畫を急いで居るとの事であつた。

同5時 18 分同所出發，同 35 分韮山町に着き，江川太郎左衞門の舊宅を見る。自然の生ける大木を大黑柱に利用して天井は非常に高く造られ，如何にも涼しさうな建物であつた。之れは今より約600年前に建築されたもので，傳ふる處によれば弘長二年日蓮上人此の地にて逗留の折自筆の防火棟符を授けられたとの事である。

同6時 18 分同所發，坦々たる修善寺街道を一路修善寺に向ひ邁進した。時既に暮色愈々迫り車中より唯村落の燈火の點在するを見るのみ，ヘッド・ライトの閃滅するを眺め乍ら此の日の行程を終らんとするのである。

午後6時 55 分修善寺溫泉菊屋別館に到着した。一同は夫れ夫れの部屋に落付き少憩の後ドテラ姿に身を代へ思ひ思ひに湯に浴び，長途の疲勞を慰し伸々とした氣持となつた。晩は靜岡縣及び清水市の好意による視察團一行歡迎の盛宴を受け，宴酣なるとき靜岡縣內務部長より丁重なる歡迎の挨拶あり，之れに對し那波會長及び前川副會長より答辭を兼ねた一場の挨拶があつた。

修善寺，三島のえり拔きの阿嬌の花やかな斡旋により宴は益々酣となり，いつ果つべしとも思はれず，愈々其の道の達人だちをしてクライマックスな雰圍氣の中に導くのであつた。修善寺情緒を滿喫したであらう人々の床に納まつたは2時頃ならん。

明くれば 22 日，午前 7 時頃よりボツボツ起床，昨日の疲勞は何處へやらと言ふ樣な元氣な顏を銘々溫泉に身を浸し，湯の香を充分に味ひ朝食をすました。

午前9時半頃迄は銘々思ひ思ひに修善寺町を見物，修禪寺，指月殿及び同境內に在る源頼家の墓等に參詣した。

修善寺溫泉は深山の谷間に位し，町の中央に桂川の淸流あり，此の兩岸にある豐富なる溫泉と溪流美とは如何にも溫泉場らしい感じ充分である。此處には東海道線三島驛より駿豆電鐵道に乘り換へて1時間餘にて終點修善寺に着き，其處より南方十餘町の所にある。此の區間には乘合自動車の便もある。

修禪寺は今より 1500年前大同年間に僧空海（弘法大師）此の地を探り，山容水態が恰も支那の廬山にも彷彿である所から此の地を廬山と號し，高弟果隣大德と共に一宇を創建して之れを福知山修禪寺と稱へ，何時の頃よりか號寺を地名と代へて文字も禪を善として此の地を修善寺と呼ぶ樣になつたと云ふことである。又弘法大師が唐から持ち歸へつた桂の杖を植えたるに，自から根を成し今に及んで巨木となつて居る。現在の桂川は其の源を此の桂樹の

基より發して居るので桂川と名付られたと言ふ事である。

指月殿には丈六の釋迦如來を安置し，地下に埋めてある名函の中には源頼家の遺骸が納めてあり，其の母政子が將軍の冥福を祈るため守版の一切經を藏めて建立されたそうである。

源頼家の墓は指月殿の左側に在り，五輪塔の舊形を失ひ，今は唯墓前の供養石標で其の位置は知られるだけで，高さ5尺許りの隋圓石塔には征夷大將軍左源頼家尊靈と右に元久六年，左に甲子七日十八日と刻してある。之れは元祿十六年，將軍の五百回忌の折修禪寺住職筏山智船和尚の建立した供養塔であるさうだ。頼家は頼朝の嫡嗣なりしが，北條時政の奸策に陷り此の地に幽せられ終に弑害された。此の時頼家の浴室に在るを窺ひ數人折重つて殺害し，其の抑の有様は愚管抄に依れば“修禪寺にて頼家入道をば善時藤馬と言ふ郎黨をして刺殺せしむ，頓には得取りつめざりければ頸に緒をつけ陰囊を取りなどして殺しけりと聞えき”とある。

午前9時30分には旅館の中庭の泉水の前にて記念撮影を終へ本日も昨日に優る絶好の天候に惠まれ，自動車をかつて沼津を指して10時愈々修善寺町と別れ，第2日の行程のスタートを切つた。(寫眞**第五**參照)

途中大仁より三津に到る街道に出で，長岡溫泉の南方を通り三津に向つた。車中より長岡附近の山崩を眺めつゝ同10時40分には三津の海岸に差し掛つた。目前には駿河灣の碧波が輝き始めた，吾々の自動車は清々しき穩かな漣が寄せては返す長汀曲浦宛然繪の様な多比，江ノ浦，獅々濱，靜浦の平和な各漁村をドライブして居るのである。

殊に三津の入江の眞中にある樹木鬱蒼たる淡島と裏側深山を控へた海岸との合間に，風も起らず波も立たず鏡の如く澄み渉つた水面に片雲だに肩にせず清澄な大空を背景とした富士の山容が反影してゐる光景は富士を賞ずる一つの恰好の場所である。

今迄の行程は各所各様の震害に依る慘狀を以て滿されて居たのであるが，震害の跡だに見出し得ぬ，宛然一幅の繪の様な此の三津の海岸に出で始めて一行の氣分は大いに軟らげられた。

同11時10分靜浦に着き，左の方に沼津御用邸を見て愈々沼津市街に入つた。沼津驛には同15分に着く豫定であつたが，時間に餘裕があつたので沼津市の東端にある東洋モスリン工場內で富士火山系のラバーの含水層の影響で地下水が多量に噴出して居る狀況を視察する事にして，同11時27分同所着，下車し現場に行き同工場跡の廣い堀割の水底から清澄な湧水所々にあり，水底に挿入されてある徑3〜4吋位の5本の鐵管より白絹の様な湧水が盛に（約500個）噴水して居る狀況を視察し同45分同所發，同55分沼津驛に到着した。

之れで我々の視察自動車旅行を終り，午後零時10分沼津驛出發，江尻驛に向つた。車中靜岡縣廳よりビールの御馳走に預り晝飯をすまし，興津驛附近にて車中より線路の右手に一

番近き小山の頂に興津川の上流より引水する清水市の貯水池の地均工事中のものを眺めながら午後1時17分江尻驛に着き，靜岡縣廳指し廻しの十數臺の自動車にて一行は清水港務所に同 1 時 32 分到着，同所にて横濱土木出張所々長木津正治君より清水港の概要及び昨冬伊豆大地震による本築港の被害狀況の概略に就き，說明を聞き夫より一行は徒步にて大岸壁の被害實狀及びランチ 2 隻に分乘して約 40 分間に涉り海上より港內一般の狀況を視察し，同2時 30 分上陸して同港務所を辭し清水江尻市街の發展振りを眺めつゝ江尻驛に向て同 3 時 15 分發にて東京への歸途に就いた。

此處で少しく清水港に就て書いて見れば，

位　　置　東海の中樞太平洋航路の要衝に位し，絶勝三保ノ岬自然の防波堤をなして，港內靜かに水深く眞に天然の良港である。

總 面 積　2 950 000 坪，水深 24 尺以上を保てる水面 1 230 000 坪，

最大滿潮位　　7.2 尺

昭和 3 年度出入船舶及び貨物の狀況は次の通りである。

入港汽船　867 隻，2 641 675 噸，最近 5 箇年間輸出入貨物總計　1 231 030 噸，59 609 955 圓

清水港修築工事

1. 工事期間　自明治 41 年度至大正 3 年度
2. 工 事 費　465 241.27 圓

多數の參加會員諸君は國府津，品川間で視察團の幹事へ 2 日に亘る其の勞を謝しながら下車された。東京驛に着いたのは午後7時 56 分であつた。

終りに臨み神奈川及び靜岡の兩縣廳の人々に本學會の今度の旅行に就て大いに御便宜を與へられし事殊に靜岡縣廳及び清水市の與へられた御厚志に對して玆に厚く感謝の意を表し本稿を擱筆する。

本旅行に要せし費額內譯は次の通りである。

支　　出

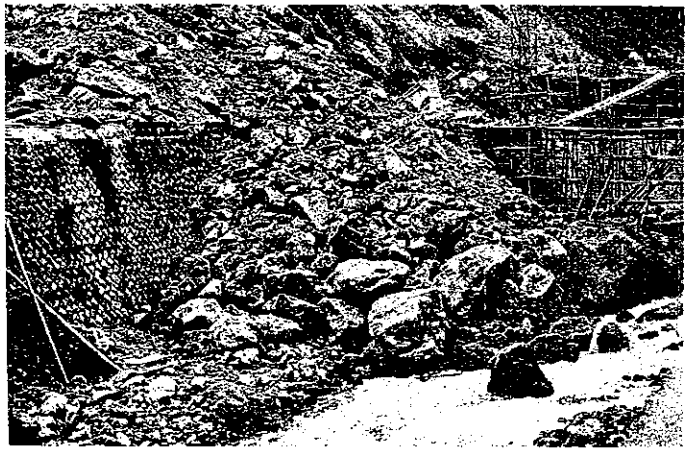
	円
汽 車 賃	202.35
貸切自動車賃	180.00
富士屋ホテル晝食及び車中辨當	205.14
菊屋旅館宿泊料及び茶代等	228.50
雜　　費	50.45
合　　計	866.44

收　　入

	円
參加會員より徵收會費	781.60
學會より出支金	84.84
合　　計	866.44

（以上）

寫眞第一

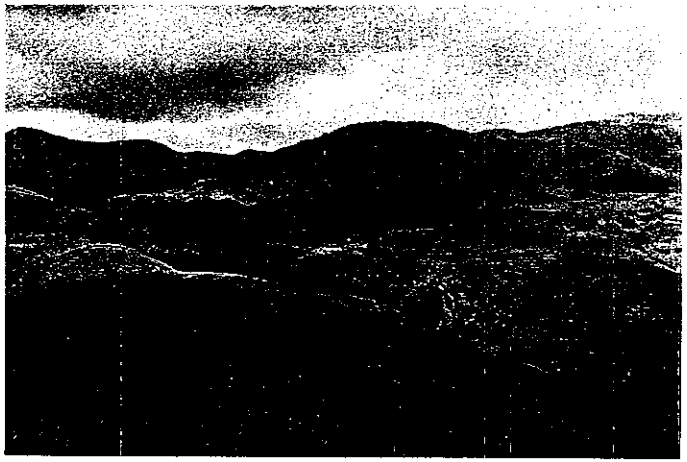


神奈川縣根本町開腹隧道工事箇所の惨狀

寫眞第二

箱根町十二丁附近道路陷沒法止壁の崩壞狀況

寫眞第三



田代盆地一角の大斷層並に地辷狀況

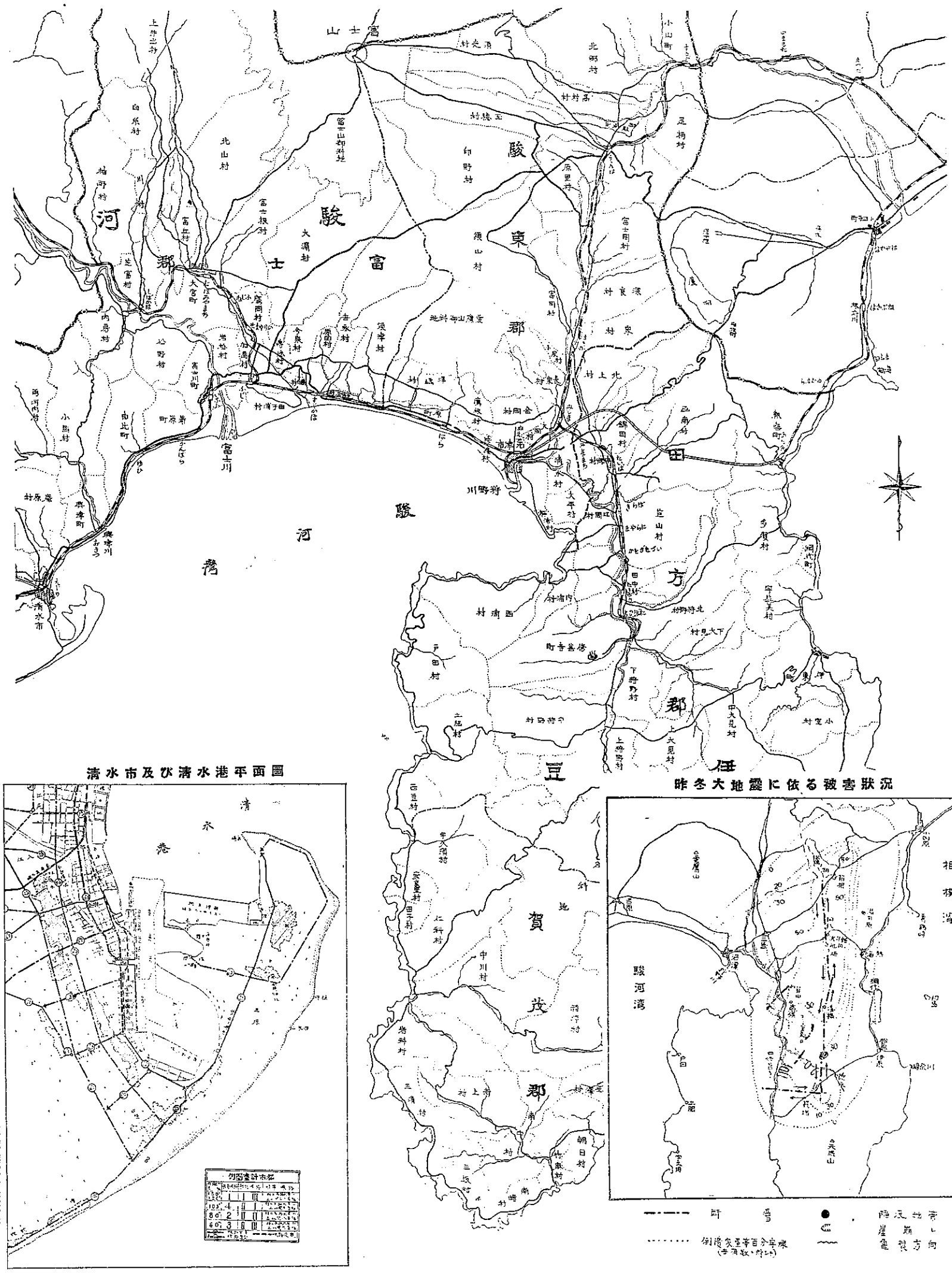
寫眞第四

靜岡縣田方郡赤王地區耕地の被害狀況（前方に見ゆるは視察中の本會員一行）

寫眞第五

靜岡縣修善寺町菊屋別館中庭に於ける視察團一行の記念撮影（昭和6年3月22日午前9時30分撮影）

附圖　駿豆地方平面圖



清水市及び清水港平面圖

昨冬大地震に依る被害狀況

（土木學會誌第十七卷第五號附圖）

寄稿に關する注意事項

(1) 御寄稿は成るべく本會の原稿用紙を用ひ横書きとすること，原稿用紙は御請求次第送附す。

(2) 御寄稿は止むを得ざる場合の外は成るべく本會の原稿用紙 150 枚（本會誌 50 頁）程度とされたし，若し前記頁數を超過する場合は適宜其の程度に縮少を御願ひすることもあるべし。

(3) **假名は平假名とし，數字はなるべくアラビヤ文字を用ひられたし。**

(4) 歐字は特に明瞭に認むること。

n と u, u と v, r と v, α と α, r と γ

其の他頭字と小字とを判然たらしむる事。

(5) **原稿には必ず冒頭に英文表題及內容梗概を添附されたし。**

(6) 附圖附表に就ては次の各項に御注意ありたし。

（イ） 圖面はその儘縮寫し得る樣にトレーシング・ペーパー，オイル・ペーパー，トレーシング・クロース等とす。

（ロ） 凡て墨色を用ひインキ類或は彩色を施さゞる事。

（ハ） 方眼紙は青罫のものを用ひ（黃色，赤色の罫は使用せざる事）縱橫線を必要とする部分には豫め墨線にて之を描き置かれたし。

（ニ） 圖表中の文字，數字は特に大きく肉太に書し縮寫したる後明瞭たらしむる事。

（ホ） 圖表類は製版の都合上可なり汚損するものと豫め御含み下されたし。

(7) 寫眞は特に明瞭なるものを送られたし。

(8) 講演，論說報告の各欄に揭載の分には拔刷 20 部を寄稿者に贈呈するものとし，尙寄稿者の希望に依り實費にて御要求に應ずる事あるべし。

算式其の他の記し方大體標準。

(1) 本文，文字間に算式を挿入する場合には次の如く記すこと。a/b と書き $\frac{a}{b}$ を避けること。$(a+b)/(c+d)$ と書き $\frac{a+b}{c+d}$ を避けること。

(2) 獨立したる列に算式を記す場合は次の如く記すこと。$\frac{1}{3}x$ と書き $\frac{x}{3}$ を けること。$\frac{1}{2}(a+b)$ と書き $\frac{a+b}{2}$ を避けること。$\frac{a}{b+c/d}$ と書き $\frac{a}{b+c\frac{1}{d}}$ を避けること。

(3) 千以上の數字は 53 247 000 の如く 3 つ單位に間隔をあけること。

(4) 名數は次の如く記し括弧の中の樣に書くことを避くること。

83.4 尺（八丈三尺四寸），7 吋（七吋），35 錢（三十五錢），13.56 圓（十三圓五十六錢），1〜4 時間（一乃至四時間），88 326 噸（八萬八千三百二十六噸），1929 年 1 月 1 日（千九百二十九年一月一日）。

新入會者にして既刊會誌希望者に告ぐ

本會々誌は新入會者には入會の月より以降發行に係るものより配布致すべきに付其の以前の會誌御希望の場合は一部に付下記金額振替口座東京一六八二八番に拂込み用紙通信欄に其旨記入請求せられたし

殘部内譯

第五卷一號二號	一部金　壹　圓
第六卷六號	同金　壹　圓
第七卷二號三號四號	同金壹圓五十錢
第八卷一號	同金　貳　圓
第九卷一號二號三號五號六號	同金　貳　圓
第十卷二號三號四號五號六號	同金　貳　圓
第十一卷二號	同金　貳　圓
第十二卷二號三號五號六號	同金　貳　圓
第十三卷二號三號六號	同金　貳　圓
第十四卷一號二號三號四號五號六號	同金　貳　圓
第十五卷一號二號三號四號五號六號	同金　壹　圓
同　七號八號九號十號十一號十二號	同金　壹　圓
第十六卷一號二號三號四號五號六號	同金　壹　圓
同　七號八號九號十號十一號十二號	同金　壹　圓
東京市內外交通に關する調査書	同金　參　圓
震害調査報告書（一、二、三）	同金　拾八圓
土木工事寫眞集	同金貳圓五拾錢

本會會員轉居又は旅行の場合の注意

會員の住所の不明なるときは會誌の配布を始め其他通信上に差支候に付御轉居の際は至急明細に御通知相成度又御旅行等にて御不在となるも會費支拂には差支なき樣御配慮相成たし

會費納付に付注意

本會々費は下記の通りにして本會より發する振替集金に對し是非御支拂願度事若し此の集金書へ十五日間中三回の取立金支拂なき場合は最寄郵便局に就き本會振替口座東京一六八二八番に（拂込用紙通信欄に會費たる事を記入の事）御拂込相成度尙會費一時納付の御豫定又は其の他の都合に依り支拂なき場合は直に御通知相煩度

朝鮮滿洲の一部及び靑島等振替貯金を取扱はざる地に居住せらるゝ會員は納期の翌月末頃迄集金を受けざるときは爲替其他の方法に依り直ちに御送金相成たし

會員種格	會費年額	自一月　至四月 第一期分二月徵收	自五月　至八月 第二期分六月徵收	自九月　至十二月 第三期分十月徵收
會　員	金拾八圓	金六圓	金六圓	金六圓
准　員	金拾貳圓	金四圓	金四圓	金四圓
學生員	金七圓五拾錢	金貳圓五十錢	金貳圓五十錢	金貳圓五十錢

新に入會したるものは月割算として入會の翌月集金を發す

會費未納に付注意

會費は從來年額を第一期第二期第三期に分割し毎年二月六月十月に振替貯金郵便として取立方を郵便局に依託の處往々集金郵便に對して故なく支拂を拒絕し尙他の方法に依りても送金なき者あれ共斯くては會費滯納者として遺憾ながら規則第十三條第一項に依り遂に會誌の配布を停止せらるゝに至るべく又本會に於ても未納金督促の手數一通ならず故に今後右樣のことなき樣特に御留意の上集金郵便に御拂込相成たし

會誌未着の場合の注意

會誌は毎年毎月十五日（印刷又は原稿等の都合に依り遲延する事あり）に發行し漏なく配付すべきに付未着の場合には一應本會に御照會相成たし從來往々發行後數ケ月經過して照會せらるゝ向あるも斯くては殘部皆無となり遺憾ながら配布不可能のことあるべきに付御留意相成たし

雜誌閲覽に就ての會告

下記の雜誌は本會事務所に備付置候間御希望の向は下記時間內御隨意に御閲覽相成度候。

閲　覽　時　間

日曜日及祭日休，土曜日自午後一時至同四時，其他自午後四時至同八時。

但し役員會，委員會等開催の日は御斷り致すこと有之哉も計られず候間豫め御承知置被下度候。

備　付　雜　誌

Engineering	工　　政
Engineering News-Record	港　　灣
Le Génie Civil	國際建築時論
Railway Gazette	造船協會々報
衞生工業協會誌	帝國鐵道協會々報
機械學會誌	鐵　と　鋼
業務研究資料（鐵道大臣官房研究所）	電氣學會誌
建　設	電氣製鋼
建築雜誌	土木建築雜誌
工學部紀要（東大，京大，九大）	日立評論
工學報告（東北帝大）	名古屋工業會々報
工業化學雜誌	滿洲技術協會誌
工事畫報	其他寄贈雜誌

廣　告　料（東京市京橋區築地上柳原町八番地 電話京橋872番、振替東京3069番 東京第一通信社取扱）

普通廣告　一回一頁　40圓　一回半頁　25圓

指定廣告
- 裏表紙三面對向及廣告初頁　一回一頁　60圓
- 裏表紙三面　一回一頁　150圓
- 色アート　一回一頁　75圓

○指定廣告は凡て一箇年繼續申込のものに限り取扱ふものとす

○會員自身の廣告に對しては總て上記料金の一割引とす

○同一廣告の連續掲載申込に對しては半箇年分五分引，一箇年分一割引とす

○廣告に寫眞版又は木版等を挿入する場合は之に要する實費を別に申受くるものとす